

強欲ルフィ

おんぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強欲様の教育を受けるルフィ

寝る子は育つエース

例の集会でルートのサボ

エトセトラ

目次

プロローグ

ルフィの強欲

エースは怠惰

サボと色欲

少年の怒り 少女の羨望

東の海

ルフィ十二歳の出航

強欲と怒り

嵐の夜の

95 77 67

45 32 15 1

プロローグ

ルフイの強欲

「はら…へつたあ」

そんな一声と共に、少年は意識を取り戻した。

背中に感じる冷たい感触は、？ふかふかのベッドなどではない。硬い、ゴツゴツとした地面が、少年が今いる場所だった。

仰向けに転がっている少年の？視界は真っ暗で、ずっと先の方に、木々に覆われた拳一つ分の日の光が有るのみだ。それでも、明かりを見つけたことで、少年の心に少しだけ余裕が生まれた。夜のジャングルに放り込まれた時よりマシだ。

「くそ…」

光をぼーっと眺めて少し、少年は歯を食い縛りながら、ポロポロと涙を流した。

甦るのは、吊り橋から落とされた時に見えた、冷たい顔だ。

？？拒絶されて悲しかった。

? 仲良くなりたかった。一緒に遊びたかった。友達になつてほしかった。

?

? 少年は、未だ七歳だ。

? 相手のことを考えるだけの余裕はない。祖父に鍛えられて打たれ強くなつていて少年だつたが——心までは、まだ強くなれなかつた。

「はらあへつたあ……」

お腹が空いて、力が出ない。一步も動けそうになかつた。

? ズボンのポケットを探つても、出てくるのは砂利だけ。そして今日食べたのは、コップ一杯の水と、茶碗半分の米だけだ。

「めしい……めしい……」

呟く程度の小さな声が、岩壁を伝つて反響する。余計に寂しくなつた。

? 少年はうつ伏せになつて、何かないかと手を地面に這わせる。以前祖父に崖から落とされた時に、同じことをやつてキノコを手にいたれたのだ。そして、喜んで食べて、笑いがしばらく止まらなくなつた。

「あ」

淡い願いは叶つた。右手の指の先に、ぷよぷよとした感触。

? キノコだ！

?少年の目に輝きが生まれる。逃がすまいとの如く、キノコ?を掴み取り、大きく開けた口の中に放り込もうとして——それが無くなつてゐることに気づいた。

\$ \$ \$ \$

少年は、真っ白な世界の中に立っていた。上下左右を見回しても、全て真っ白で何もなかつた。

「どこだここ??」

谷底にいたはずた。とてもお腹が空いていて、キノコを見つけて、でも食べようとしたら無くなつていて——

「左手……」

左の手のひらを訝しげに見る。そこにキノコはなく、崖から落ちた時にでも出来たのか、切り傷が一つあるのみだ。

?少年は諦めた表情になつて、所在なきげに手を開閉する。そして、手を横に傾けた時に気づいた。

?手の甲に、見覚えのない模様があつたのだ。

「なんだこれ…」

「、よう、ガキンチョ、」

突如、後ろから声がした。

誰かいたのか！

？少年はホツとして振り向く――

「ぎやあああああーー!! オバケー!!」

？「、はあ?」

振り向いた先、というかすぐ後ろに大きな顔のような物があつた。黒い影に、鋭い二つの目と、剥き出しの歯。

？それが、ゆらゆらと宙に浮いているのだ。

「ま、まけねエゾ！オバケにだつて！おれは海賊王になるんだ！こいつ！」

「、おいおい…聞く耳ねえなこりや。……おつ，」？

影は、一瞬で人の形をとつた。十代中頃の、目付きの悪い少年の姿に変化した。
「ひ、人になつた…」

？「、…なんでリンの姿なんだ。…まあいいか。俺は強欲つてんだ。よろしくな、」

？

？少年は、啞然とした様子からハツとなつて、グリードと名乗つた人物を睨み付ける。

「おれはルフィだ。なんなんだお前！」

？「何つてそりやあ：なんだろうな…。ストックは一つもねえし…ただのグリー
ドつてどこか？悪いな、わからん，」

？「じゃあ、仕方ねエカ」

？「…素直なガキだな、お前，」

？「ガキじやねエ！ルフィだ！」

？「おう、ルフィ，」

グリードは、現状に頭を悩ましながら、ルフィの頭をわしわしと撫で回す。

？ありえないーーなんて事は、ありえない。これを持論とするグリードとしても、こ
の事態に混乱していた。

ホムンクルスとしての、？数百年分の記憶ーーは、あるとは言えないが、リンの身体
を乗つ取つてからの記憶は全てハツキリとしている。

そして？最期、自分が消えていくのを感じてーーと、思つたらここにいた。

？訳がわからない。

？だが、自分はツイている。それだけはわかつた。今なら、神とやらに祈つてもいい
くらいだ。

？やめろーと抵抗するルフィの手を避けながら撫で続けていると、あるものが目につ
くくらいだ。

いた。

? 驚きはない。少々勝手は違うが、一応納得する。

「ルフィイ、その手のヤツはどうしたんだ?」

「ん? 知らねえよ。さつきまでなかつた」

? 「ほー、」

? 「それより、グリード。友達になつてくれよ」

? 「はあ?」

グリードは、撫で回す手を止める。そして、胡散臭げにルフィイを見つめた。

? キラキラとした視線が返ってきた。思わぬ事態に、笑みが漏れる。

「……くくっ、がつはつは! それよりいいものがあるぜ。まあ、ちよつとばかしがきすぎるがな、」

? 「だから、おれはガキじゃない!」

? 「あー悪い悪い。：と、さつき海賊王とか何とか言つてなかつたか?」

? 「うん、おれは海賊王になるんだ。いつか強い仲間を見つけて! 世界一の財宝をみつけて、海賊王になつてやるんだ!!」

?

? グリードは、ルフィイの言葉を聞いて眉を潜めた。こんな子どもが、日陰者中の日陰

者、ましてやその王などになると豪語しているのだ。どんな育て方されているだろうか。親の顔が見てみたい。

？だが、その意気込みは嫌いじやなかつた。子どもながらに、この強欲。悪くない。？自然と口元が吊り上がつていく。

「はつ！やつぱりガキだな！リンの奴もそうだつたが、小さい小さい…；」「なんだと！」

？「海賊王、海賊王か：いいぜ、何であれ王を望むその欲、中々じやねえか…；」怒るルフィを尻目に、グリードは益々機嫌良さそうに笑みを浮かべた。

そして、かつてを思い出しながら、同じ言葉を繰り返した。

「けど、どうせならよ…—世界の王になるつてのはどうだ？」
「…え？」

ククつと、笑みが漏れる。

「この世の物全て俺の物!!

？ 金も欲しい！女も欲しい！

？ 地位も名譽も

？ この世の全てが欲しい!!」

ルフィの頭に左手を乗せる。そして、膝を折つて目線を合わせた。

「だが、それよりも欲しいもの…大切なものを教えてやる…？——仲間。魂の仲間だ…自分の魂に誓える仲間が俺は欲しい!!じゃ、これからよろしくな、小さな相棒よ!!」

\$ \$ \$

三日後——。

?

「うめえ」

?『喉につまんぞ、もうちょっとゆっくり食べろよ』

?「わかった。うめえ」

太陽が高く昇る時間帯、ルフィは焚き火の前で、骨付き肉を頬張っていた。

?ルフィの目は、次はどこを食べようかと、丸焼き肉に釘付けだつた。

ルフィは三日前、感情の高ぶりに流されるままにグリードと握手を交わした後、ほどなくして現実へと戻った。そして、僅かに回復した体力で谷底から這い上がってきたの

だ。

？途中、狼に襲われそうになつたが、グリードがルフィの身体の主導権を握り、飛び出してきた一匹を撃退した後からは、狼の群れは一定の距離から近づいてくることはなかつた。

「うおっ、親指が真っ黒になつた!!」

？『ルフィの“時”はこれが精一杯なんだよなあ…通りが悪い。んで、』
グリードとルフィの身体の主導権が入れ替わる。

『おい！まだ肉食つてる途中だ！グリード！』

？『俺の“時”は、全身可能っぽいんだが…ゴム…じや、なくなるのか？それと…何か違げえなこれ、』

グリードは、顔以外の全身が黒一色に染まつた姿を水面に写して、両手を打ち鳴らしながらぼやいた。

？『グリード！肉が食いたいなら、先に言えよな！でも、これは俺のだ！』

？『身体の主導権も、半々…と、』

？『聞いてんのか！』

？『ん、ああ。聞いてるよ。肉は全部食つていいぜ、』

？『そつか。ならいいんだうめえー』

？『……俺が力を使つたら、こいつはいくらでも食うつてのも追加。あと試してねえのは——』

？「もぐもぐ……なんか言つた？」

？『、いっぱい食つて、早く大きくなれよ、』

？「……おう」

二ヶ月後——。

「いでエ!!かすつた! グリード! 助けてくれ!」

？『、バツカ野郎、俺にばつか頼んな。これくらい自分でなんとかしろ。エースと友達になるんだろ?』

？「そんなこと言つても! ハア……ハア……でけエし!!」

ルフィは、自分の何倍もの大きさがある熊に襲われていた。

『、ほら、気の流れを読むんだよ。……そう、自分の手のひらを見るようにな、』

？「ツ! グリードはできないのに何でそんなに偉そななんだ!』

？『、俺はいーんだよ。出来なくとも硬化があるし。でもお前はやれよ。少しでも感

触あるなら、リンにやれて、相棒に出来ない道理はねえ、』

? 「⋮へへつ」

? 『バツカ、油断すんな!』

熊の鋭い爪がルフィの肩部を捉えて——ガキイ!と硬質な音が鳴る。ルフィは吹き飛ばされ、木に勢いよくぶつかつた。

「いてえつ!……あ、痛くはねエ!おれゴムだから!グリードありがとな!」

? 『アホ言つてないで立てよ。次来んぞ、』

熊が怒声を上げた。切り裂くつもりで振るつた爪は、無惨にも半ばから折れていた。

? 怒り一色の顔だ。目は血走り、ダラダラと涎がしたつている。

「うつ」

? 『あー⋮代わるか?』

? 「いいよ!まだやるつ!おれは負けねエ!」

? 『よつしや、そうこなくちやな相棒!』

ルフィは斜めに構えた。そして、自分に言い聞かせた。

? 自分でもかわせる。まだできる。今は倒せなくとも、いざれは必ず!

「お前のにくは!おれのものだア——!!」

? 『いいねいいねええ；』

三ヶ月後——。

「よう！久しぶり！」

「ルフィの奴が帰つて来やがつたぜ!!!」

？「コイツ…生きてやがつたのかいっ!!」

？「誰だつけこのチビ：」

夜、ダダン一家のアジトは、大騒ぎだつた。ガープから預かつたルフィが、初日に行方不明になつてから三ヶ月も経つた今になつて戻つてきたのだ。

？行方不明になつた当初は、流石に不味いと考え、何度か一家総出で捜索したもののが見つからない。こつそりフーシャ村にも確認しに行つても、その姿はなし。もはや誰もが、ルフィが生きてはいないと思つていた。

？そのルフィが帰つてきたのだ。

「コラルフィー！お前この三ヶ月何してやがつたんだ!!」

ダダンが冷や汗を流しながら叫ぶ。そろそろガープに言わなければと思つていたところで、焦つていたのだ。

「三ヶ月もたつてたのか。：誰だつけ、ばあさん」

？「ばあさんて!!おめエあたしはまだそんな歳じやねエ!!」

？「そつかごめんババア」

？「ダダンだよ!!てめエブツ飛ばすぞ!!」

？「お、うまそうな肉」

？「聞きやしねエ!!それに、あの肉は食わせねエぞ!!エースが獲つてきたもんだ!前にも言つただろ!」

？「まーまーお頭、今日くらいは…」

山賊達が、ダダンを宥めようとする。

？その横を、ルフィがスタスタと通りすぎた。

「おれ、今日はもう食つたからいいよ。それより寝る」

？「はあ…!?」

？「グリードだ。これからよろしくな、お前ら、」

ルフィは、奥に入つていった。

「訳わからネエが、これだけは言えるぜ——エース以上の化け物かよチクシヨウツ!!

ダダンの悲痛な叫びが、コルボ山に響き渡つた。

？

14 ルフィの強欲

エースは怠惰

「ハア…ハア…」

少年は追われていた。

??見慣れた風景が後ろへ流れていく。それなのに息が上がる。

?枝先で引っかけた頬が、ズキズキと痛む。靴の中に溜まつた泥が、足を鈍らせる。

森の中——河を、沼を、岩場を、木々の間を必死になつて駆け抜ける。追つ手を退けるために、持つている鉄パイプで岩を落とし、凶暴な動物をもけしかけた。
?しかし、どれもさほど効果はなかつた。

「エース！」

もう四日も続いている。三ヶ月前とはまるで違うルフイの動きに、エースは気味悪さを感じていた。

?ダダンら山賊達が話しているのを昨夜も聞いたから尚更だ。

? 曰く、ルフィには悪魔が憑いた。

?

? 突拍子もない話ではあるが、エースも納得せざるを得なかつた。だつて、そう考えなければあんなガキ——いくらゴムであろうと——が三ヶ月もの間、この山で生き残れるはずもないのだ。

「なあグリード、さつきこ通つたよな！」

そして、その悪魔の存在を、ルフィも隠そうとしていない。そればかりか、アジトに戻ってきた次の朝には、わざわざ悪魔の紹介までしていた。

「…」

ふと思つた。自分は鬼と呼ばれ、ルフィは悪魔扱いされている。

? どちらのほうがましなのだろう。

「なあなあエース！どこに行くんだ！おれも一緒に行きたいんだ！連れて行つてくれよ！」

だが、気味が悪いことにはかわりない。得体の知れないものを、サボに閲わらせたくもなかつた。

「うわっ！危なっ！」

また避けられる。

？「チツ！ついてくるな!!」

？「…わかった！また明日！」

しかし。

？何が基準かはわからないが、一定の距離カンを取つて、それ以上は近づいてこない。この数日、その繰り返しなのだ。

？その妙な聞き分けの良さが、エースの神経を逆撫でする。

？だつたら最初からついてくるな。

？エースは、ルフィの方を一瞥し——落ち込んだ様子のルフィが目に入つたところで目を反らして、その場から去つていつた。

「なあ…グリードお…」

？『、ま、しようがねえな。明日からは作戦変更だ、』

次の日——。

「やつたー！友達だ！仲間ができた!!グリード！おれに友達ができたんだ!!」

「エース、グリードって何だ…？」

？「…さあな」

今日の朝。ルフィは、ここ数日は何だつたのか——エースの前に姿を見せなかつた。
？そう、然程気にしなかつたのが間違いだつたのだろう。実際のところ、ルフィは
こつそりと自分の後をつけてきていたのだ。

？最悪なことに、サボと一緒に五年間貯めていた海賊貯金の存在を知られた。そのう
え、口を封じるために、サボと二人がかりで捕まえようとしても、ルフィは捕まらなかつ
た。

？

？「なんで捕まらねえんだ!!クソツ」

？「エース、おれちよつと休憩…」

不運は続く。

ブルージャム海賊団の船員ポルシェーミが報復にやつてきた。？エースがチンピラ

達から奪つた金は、商船のものではなく、ゴミ山を牛耳る海賊の金だつたのだ。

?逃げようとしたときにはもう遅かつた。サボがその手に捕らえられてしまつて いたからだ。

エースには、?サボを見捨てて逃げるなんて考えは存在しない。しかし戦おうにも、サボは連れのチンピラに首に刃を当てられている。

——?抵抗すれば、殺す。

?もはや、ポルシェーミに従い、金を渡すしかなかつた。

「おい、おれの仲間（になる予定）に——なにしてんだ!!!」

——いつのまにカルフイが、チンピラに腕を振り上げたまま、叫んでいた。

?

?瞬間。

?サボを捕らえていたチンピラを含め、ポルシェーミを除く海賊達が、口から泡を吹いて崩れ落ちた。

?ルフイが、呆然と固まつているサボの手を引いて、ポルシェーミ達から距離を取つた。

「……あ!!やつた、見たかグリード!!今、気が…気が出せたんだ!やつぱり!何か出せると思つてたんだおれ!!!!……まぐれじやねエ!」

また、グリード。

? 喜んだ後に落ち込むルフィの様子を見ていたエースは、それ気づいた。

「避けろっ！」

「ガキがア!! 何をした!!」

ルフィが、ポルシェーミに気づいた。しかし、ポルシェーミを見てビクリと固まる。

? ルフィは動かなかつた。

? ポルシェーミの剣の凧ぎ払いによつて、ルフィは切り飛ばされ、草木の中に突つ込んでいつた。

「…つ!! サボ!! やるぞ!!」

? 「あつ…ああ!!」

「おいつ無事か！ お前！」

エースは激闘の末にポルシェーミを下し、縄で縛るのをサボに任せて、ルフィの元へ急いだ。

? 戦いの最中も一度も出てこなかつたのだ。まさか、動けないほどの重症を負つて——

「え…エース…」、「ごめ…おれ戦わないと…いけなかつたのに…ウウウ」

ルフィは、顔をぐしゃぐしゃにして震えていた。途切れ途切れの言葉を聞いて纏める
と一動物達とは全然違つて、怖くて動けなかつたらしい。

? エースには、それが理解できた。単純な動物達とは違い、人間は様々な悪意を持つ
ている。よく身に染みていることだ。

しかし今は、それが少し可笑しかつた。

? 気味の悪い存在であるはずのルフィが、ただの子どものように泣いているのだ。

「くくっ」

? 「グスつ…」

その日から、エースに仲間が一人ーー

「おお、すげえなお前ら。ガキ二人でここまで金を集めるとば中々…」
いや、二人増えた。

・・・・・

? 海賊達の一件から、サボが“不確かな物の終着駅”を出て（追われる形でだが）、ダン一家のアジトで一緒に暮らすようになつた。

? 山で日々高め合い——

「、 気の流れを読めお前ら。手のひらを見るようにな、」

? 「グリードそれしか言わねエ……」

? 「、 ルフィはそれで出来てんだからいいんだよ。現に、半分は避けてんだろうコイツ

、

? 「しししし！」

? 「グリードとルフィ……入れ替わつたらすぐ分かるなあ」

そして、町の不良達、 “ゴミ山” の悪党達、入り江の海賊達との戦いに明け暮れる日々
が続いた。

「何読んでんだルフィ？」

? 「、 残念、グリードだ、」

? 「あー。ルフィは本なんて読まないよな」と、サボ。

? 「バカにすんな！俺だつて一緒に読んでるぞ！文字だつて書けるし！手紙だつて出

したんだ！」

? 「はア？ お前が？」

? 「、本当だよ。ルフィは本読むぜ。お前らも読むか？ “東の海の植物図鑑” と “肩

もみの基本”、あと新聞、」

? 「植物図鑑で」

「おれ新聞」？

? 「、村長のじーさんからの借りモンだから汚すなよ。新聞はアジトにあつたから別
にいいけどな、」

ルフィのリュックから、エースは図鑑、サボが新聞をそれぞれ取り出す。そして、各々
が読書を始めた。

「…え？ …天竜人…」

? 「、あ？ サボ知つてんのか？ 来るらしいな天竜人つてのがこの国に、」

? 「天竜人つてなんだ？」

? 「世界貴族つて言つて、世界で一番偉い人のことだよ」

? 数日後、町に行つたことで、サボが貴族の息子だと知ることになつた。
エースはサボが貴族だと知つたところで、たいして気にしなかつたが。
? そして、それぞれの “先” を語り合い、晴れて兄弟の盃を交わした——。

・・・・・

「じいちゃんが来たぞ!! エース! ルフイ!」

?

？ある日村長とマキノが山に来て、村の子ども服の古着を貰った数日後に、次はガーブがやつてきた。

「久しぶりだなジジイ」

？「よ、じいちゃん。手紙で頼んだ本くれ！」

？「こら貴様ら!! もつと喜ばんか！」

理不尽な拳が、エースの頭上から飛んでくる。

しかしエースはそれを、難なく避けた。目線をチラリとも向けることなくだ。

「ぬ、エース貴様……」

ガープは目を白黒させた。本気でやつた訳ではない。しかし、十歳そら（ガープ基準）の子どもに避けられるとは思っていなかつたのだ。

？表情を固くさせる。

「危ねエ!! 何すんだじいちゃん!!」

？次はルフィに向かつて拳を降り下ろす。

ルフィは、ガープの拳が到達する前に、大きく飛び退いていた。以前とは、明らかに段違いだ。

? ガープの表情は更に険しくなつた。

「…お前達、なぜ『霸氣』を使っておるんじや」

「?」

「…え? 知らんの?」

エースとルフィは、首を傾げて顔を見合させる。そして、目配せして頷いてーーなるほどと手を打つた。

「じいちゃん、おれ達気を読んでるんだ。自分の手のひらを見るように。な、エース!」

? 「そうだ。手のひらを見るようにな」

「…未恐ろしいガキ共じや」

ガープは呆れていた。どこで思い付いたのかよく分からぬ理論で、見聞色の霸気を、未熟ながらも習得していたのだ。海軍将校でも取得者は稀なそれを、十歳そこらの子どもが垣間見せている。

? 結局ガープは、『血』か?と納得した。

? むしろ、鍛えがいがあると云うものだ。

「む！ルフィ刺青なんぞしおつてエ！この不良孫がア!!」

？「いでエ！おれゴムなのに！痛いっ止めてくれ！じいちゃん!!」

？「ルフィイつ！この、くらえ！くそジジイ！」

？「じいちゃんに向かつて手を上げるとは、何事じやエース!!」

？「飯できたぞ、エース、ルフィ：つて何だこのじいさん！敵襲か！」

？「何じや貴様ア！」

？「うおおおお！危な！」

……

その日、エースは食材探しに山を駆けていた。サボとルフィも同じく駆け回っている
ころだろう。

？今日の勝負は夕食。誰が一番大きな獲物を——ではなく、誰が一番旨いものを出せる
かの勝負だ。提案はグリードである。

？これには、少々分が悪いとエースは感じていた。ルフィとグリードのセットで、問題
のグリード——最近料理の本を読んだのか、グリードの作る飯は旨い。ただ肉を焼く
にも、自分がするのとでは、かなり差が出るのだ。

?そして、サボもそれに影響されている。この前食べたシチューは美味しかった。

「おつ」

気配で、頭上を鳥が通つたのがわかつた。目で確認すると、大きな鳥の影だつた。そ
れが、数本先の大木に突つ込む。

「よし、卵ゲット」

肉も手に入るかも知れない。

?エースはニヤリと笑つて、大木に足を掛けた。

「なんだ? これ」

エースは、歪な形をしている赤い石を左手に持つて、太陽の光に透かして眺めていた。
見つけたのは、二十メートルほど登つた先にあつた鳥の巣の中だ。ちなみに、鳥の卵
は一つもなかつた。光沢のあるガラクタが巣の中に散らばつているだけだつた。

「うーん?」

見たことのない石だ。少し柔らかいような、なんの変哲もない石だ。しかし、なぜか
目が離せない。

?どれほど眺めていただろう、ぼーと眺めて警戒を疎かにしていたエースの背後を、

戻ってきた巣の主が襲つた。

? 手から石を弾かれ、木から足を滑らせ——葉っぱの生い茂つた細い枝を何本も折りながら、エースは地へ落ちた。

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

「…おい」

エースは、一面真っ白な世界に立っていた。そこにぽつんと——いや、どすんと一つの巨体があつた。

? それは、大の字に俯せしていた。

「……」

?

? 反応はない。

? エースはジリジリと巨体に近づいていく。

「お前は誰だ。ここはどうだ。お前が助けてくれたのか」

? 「めんどくせ……俺……スロウス……」

? 「お前喋れたのか……怠惰？」
スロウス

エースの中で、何かが引っ掛けた。

?

? 「あ、それ…」

答えは、直ぐに見つかつた。未だ顔を上げないスロウスの右肩辺りに、見覚えのあるものがあつたのだ。

「お前、グリードのこと知つてるか」

? 「…ああ……」

? 「…まあいいや。取り敢えず、ここから出せよ」

? 「…しらね、」

? 「おい」

? 「…」

? 「何だコイツは」

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

「ただいま」

「エース！遅かつたな！」

？「何してたんだ？お前、何も持つてないじゃないか」

新しく作つた自分達の家の木の下で、ルフィとサボが心配そうな表情で駆けてきた。
？それはそうだ。もう日はほとんど沈みかけているのだから。こんなに遅くなつた
ことはなかつた。

「おい待てエース。何か妙な気配がするんだが、気のせいいか？」

ルフィが——いや、グリードが警戒した面持ちで言つた。サボは困惑した表情で、交
互に見遣つている。

？エースは、やつぱり……と諦めたように手を上げた。

「待てよ、グリード。でも多分お前の予想の通りだぜ」

？「ほー……で、どいつだ？」

？「スロウスつて。こいつ何もしやべんねエんだ」

？

？スロウス：の辺りで、グリードはあからさまに警戒を解いた。そんなグリードの様
子に、エースも釣られてホツとした。

「よかつたな。そいつは“当たり”だよ。“外れ”がいるのかは知らねえけど。性格
も……まあ無害な奴だ。能力的にも悪くねえよ。たぶん」

？「たぶんかよ」

? 「そののろま野郎に、力貸せつて言つてみ」

? 「…? わかつた。スロウス、お前の力? ちよつと貸してくれ」

? 『…? めんどくせ…; 』

? 「おい」

何もないんだけど…と、グリードに文句を言おうと一步踏み出したところで——エースの意識は激痛と共に途切れた。

? エースは、サボとルフィの間を抜けて、大木に激突した。

「あ、やべ…制御できねえのかコイツは、」

「エースつつ!!」

エースは、身体がバラバラになるんじやと思うほどの激痛を味わうことになつた挙げ句、暫く寝たきりの生活を送ることを余儀なくされた。

サボと色欲

砲撃たれされた。

? 一度目のそれに、なぜそうなったのかわからないまま、必死に船から燃え上がる炎を消そうとした。

? そして、二撃目。

? 少年は、今度はそれが到達する前に気づくことができた。

? 飛び退く。

?しかし、爆発は大きく、直撃とは言わずとも、爆炎は少年の胸を焼いた。

少年は、? 海へと墮ちてゆく。

? 手を伸ばすも、風に乗つて舞い上がる帽子には届かない。

? 何に掴まることもないままに海に落ちた少年を、モクモクと広がる硝煙が隠していった。

『ふーん…？ひんやり冷たくて、別にまだこのままでよかつたのだけど…久しぶりの入浴もいいものね、』

ルル

甘く、吸い込まれてしまいそうな香りが鼻をくすぐった。

？頭の後ろに、どこまでも沈みこんでいく柔らかな感触。
？額には、少し冷たくて、でも安心する温かさがある。

「うーん…」

「、目…覚めた？」

声に反応して、サボはうつすらと目を開けた。最初に目に入ったのは、二つの山。そ

して、その奥に、微笑を携えた女の顔があつた。

「…!？」

？「こら、だめよ。まだ横になつてなさい。」

慌てて上体を起こしかけたサボだつたが、ぼすんと、また元の位置に戻されてしまう。

？サボは目を白黒とさせて、女を見つめた。

？「ずっと起きなかつたのよ。あなた、何があつたのか覚えてる？」

？「あ…おれ、撃たれて…」

？「そう。そして、その時にできた胸の傷口から、私は入つたの、」

？「は…あ…？」

女は、可笑しそうに笑つた。

？何となく恥ずかしくなつたサボは、慌てて顔を背ける。

？しかし、両頬を捕まえられる。女が覗きこんでいた。

？「ごめんなさいね。あなたの記憶が自然と流れ込んでいたの。だから、私はあなたのこと、もう知つちゃつてるわ。——私は、色欲ラスト…そうね、最強の矛よ、」

サボは、いきなりのことに、目をパチクリとさせた。

？「え、じゃ、じやあ…グリードとかと…」

？「ええ、私はあの子達のお姉さん、」

? 「……」

? 「、何? そんなに見つめられたら穴が空いてしまうわ、」

? 「……あ……ごめん。その、おれ少し羨ましかつたんだ……だから、嬉しくて……えつと……ラスト姉さん……?」

? 「、……;」

? 「あつ、ご、ごめん、おれ——」

? 「、……ああ、いえ、いいのよ。ただ、そう呼ばれるのに慣れていないから……ラスト、でいいわ、」

?

? そう言つて、ラストはサボの頭をゆっくりと撫でる。サボの頬がぼつと赤く染まつた。

「うん……」

? 「、……ふふふ、」

ゆっくりと時間が流れる。

? サボは心地よい幸福感に包まれ、その身を任せていた——が、ハツとなつて、ラストに尋ねる。

「おれ、どのくらい寝てたんだ……?」

? 「、一ヶ月ほどね。もしかしたら、私が入ったことで起きれなかつたかもしれないけど、」

? 「…じゃあ？」

グリードみたいに、自分の身体を？

?

「、ええ、そうよ。この一月：いえ、三週間ほどかしらね。現実では、私が身体を動かしていたわ、」

? 「そなんだ…今どこに…？」

? 「、船の上よ。ほら、火事の時にあなたが会つたおじ様のね。もう、ゴア王国はずつと遠くよ。戻りたくても、すぐには戻れないわ、」

? 「…そつか」

? 「、寂しい？」

? 「…ううん、いいんだ。エースとルフィには手紙書いてきたし。おれは、海に出られたんだ…ありがとう、ラスト…」

?

サボがいなくなつた、真つ白な世界。

?ラストは、一人微笑んでいた。

想うのは、誰にも止められることのない意思を示した、少年の記憶。

“何よりも一番怖いのは…おれがこの国に飲まれて、人間を変えられることだ…!!”
「——可愛バカい子。心配しなくていいわあ…あなたが……私があの国を変えてあげる。あなたは、あの国を手に入れるの——いえ、もつと…もつと，」

ル
ル

「うーん……あ、揺れてる…」

サボは、目を覚ました。

? 他には誰もいない、一人だけの船室。今いるベッドと、一組の机と椅子があるのみだ。それなりに大きな机の上には、数冊の本と、大量の紙束。

? あ、鏡。

? サボは、ベッドから飛び降りて、鏡の前に立つた。

? 目についたのは、シャツから覗く、首もとに入った大きな火傷跡。触れてみると、少しだけ痛みを感じた。

? 視線が上に行く。

「…あれ…?」

こちらを見ているのは、見慣れた自分——のようで、自分ではない…?

? なんかこう、自分はもつと男らしい顔つきだったはずだ。

『,あ、よかつたわ。ちゃんと元に…;』

「ちゃんと?」

『,いえ、何でもないわ。気にしないで,』

トントン、とノックが鳴つた。

? 返事をする前に、一人の声と共にノブが回る。

「ラスト。またこの国の情勢が変わった。どうやら君の予想通りだつたよう——」現れたのは、記憶にある男だつた。以前は深く被つたフードで見えなかつたが——顔の左面を覆う、特徴的な刺青タトゥーに目がいく。

『……まつたく、また無断に……』

？「おっさん？」

「——む。ラストではないな。では、あの時の少年……目を覚ましたのか」

男は少し驚いたように目を開いて、続けて歓迎の言葉を述べた。

「ほう、声の高さからして……本当だつた……まるでアーツのようだな。——私はドラゴン」という。君の中にいる色欲ラストに、話は聞いている

？「ラスト、このおっさん今何か気になること言つたんだけど」

？『私の時は、何故なのかは分からぬけど……あなたの身体、女の子……みたいになつてたのよねえ。戻つてよかつたわね、』

？

「えつ」

：
：
：

「ヴァナタ！そんな歳で見聞色の霸氣を扱えるの!?本当に貴族の子!!」

？「ラストは使えねエの？」

？『、そうね：グリードも使えなかつたようだし、そういうものなのでしょうね：でも、』

サボは、右の上腕の中頃から、手に向かつて“力”が伝つていくのを感じた。

？人差し指をぴんと立て、あとは閉じる。こうしなければ、中指が大変なことになる。
？黒の線は中指の付け根をも侵食しながら、人差し指を伝つて、更に伸びてゆき、サボの腕ほどの長さまでそれは伸びた。

「ソレが……どんなものでも貫くナブル最強の……矛!!」

？『、あなたでは、今のところこれが精一杯だけど、私は全て可能だしね、
？「早く解いてくれっ!!」

？『、はいはい：私は別にいいのよ?』

? 「いいからつ」
? 「ヴァターシ：無視されてるツ!!」

『、ほら…あなたの力じやまだ厳しいのよ。今は避けきれているけど…このまま
じや、あなたの体力が先に尽くるわ。最強の矛を使いなさい、』
「まだツ！まだだ！！まだおれだけでやれる!!勝つてみせる!!」
?『、そこまで嫌がらなくてもいいんじやないかしら…；』

「うーん…」

『、知識は宝よ。ご褒美あげるから、頑張つてね、』

？「…ごほうびつて…そんなの要らねエよ」

？「『、ひざまくら…あなた好きでしょ？…それとも別のこと想像した?』

？「つ！…うるさい…このババア！いい加減：いい加減にしろよ！おれは知ってるんだぞ!!グリードの姉つてことは…ラストが最低二百年以上は生きてるクソババアだつて!!」

？『、は？、』

（）

「よつしや！二本に増えた！」

？『、ふふ、おめでとう、』

？「…うん、ありがとう。…ラスト、おれがんばるよ」

?『ええ、あなたはまだまだ成長できるわ。がんばって、』
?「うん」

（）

「ラスト、爪頼む」

『：ねえ、別にこのままでも、』

?「でも、早く終わるだろ」

?『、そうだけど；』

?「じゃあ、いいだろ。この前は悪かつたつて」

?『、……』

サボは、明らかに格下…もしくは、どうしても敵わない相手の場合に、最強の矛色欲の力を使
うようになつていた。

?後者には、問題はない。

?問題は…サボが、格下相手に矢鱈と“力”を使いたがるのだ。

?しかし、ラストは拒否できなかつた。サボがこうなつたのは、自分にも責があるか

らだ。故に、断ろうにも断れない。

? ただ、もう少し使用回数を減らして欲しいわ…と、ラストは思つた。
? 割りと切実に。

ゞ
ゞ

そして、十五歳になる年の夏——サボは再び、ドーン島の大地に足を踏み入れた。

? ?

少年の怒り 少女の羨望

母ちゃんが死んだ。

まだ少年とは言えない年齢の、その子どもは、海岸の端っこで独り、心ここに有らずな様子で夜の海を眺めていた。

?母を墓に埋葬したのは一一日付が変わる前の一一昨日のことだ。

?今晚はうちに泊まつてはどうかという、村長の申し出は断つてはみたものの、子どもはベッドに入つても一向に寝つけなかつた。

?母のいない家が、一人きりの家が、寂しくて堪らなかつたのだ。

「父ちゃん：」

子どもは、悲しみで喉を濡らしながら呟く。誰にも届かないその声は、波の音に容易く搔き消された。

それから、動くのも億劫になつた子どもが、海に目を向けたまま、うとうととし始めた時、子どもの周囲一帯に巨大な影が射した。

「な、なに…」

月明かりが遮られ、影の中にいる子どもは、突然訪れた恐怖によつて意識を覚醒させた。

? おそるおそる見上げる——子どもは、目を丸くさせた。

? 雲一つない夜空に、円状の巨大な雲がプカプカと浮いていたのだ。

「す…すげエエ!!」

子どもの目が、星のようにキラキラと輝いた。得体の知れないものを前に、冒険心が恐怖に打ち勝ったのだ。なぜなら、子どもから見える雲の底に、人工物らしきものを見つけたからだ。

? 本来ならば、人目につかないそれは、飛び抜けて視力が優れた子どもによつて、見つけられてしまつた。

その時。

? ひゅー、と風を切る音が辺りに鳴り響いた。興奮の最中にいた子どもは、その音に気づけなかつた。

? 直前には、見えた。しかし、気づけたそれに、子どもの身体は反応できなかつた。

?

? 「ひつ」

ドロリとしたものが、子どもの片目を覆つた。

反射的に瞼を閉じるも、焼く？ような激痛が、子どもを蝕む。

？幼い精神は耐えきれず、悲鳴をあげることもなく、その意識を終わらせようとする。
？しかし。

？意識を闇が覆い尽くす寸前、子どもにある感情が生まれる。

？その子どもが最後に抱いたのは、悲しみ、恐怖、後悔、苦しみ——では、なかつた。
？

？それは、引き出されたのだ。

——父は、勇敢な男だ。

？勇敢に海へ旅立つた、誇るべき父。そう、母が言っていた。だから、自分も父を誇りに思っている：父と同じように夢だつてみる。だつておれは、海賊の息子だから：

……違う。違う。違う——!!!!

？

？母の死に際の顔は、寂しそうだつた。言葉は力強かつたけど、無理に笑つていてるとこに気づいていたのだ。

? 海に出て、何の便りも、手紙の一つも寄越さない父。

? 海賊。それは…それは母よりも大切なもののなか。

?

? ——くだらない!! 何が…母ちゃんをほつといて…何が勇敢だ!!!

? 子どもが抱いたのは、原初の感情。

? それは、幼い心のままに任せた、我が儘とも言えた。

? しかし確かに、その小さな怒りの炎を今、胸に灯したのだ。

?

? ぶつん、と意識が途切れる。そのまま、前のめりに地面へと倒れていく。
涙を溢れさせる左目の瞳が、赤く光り輝いた。

半日後、その子どもが家にいないことに気づいた村人達より、捜索が開始される。

? 倒れていた子どもを見つけたのは、村の外れに屋敷を構えた富豪に仕える、年配の
メイドだつた。

「大変…鼻が…折れてる——!!」

子どもは、富豪の屋敷に運ばれる。

?しかし、村人達がホツとしたのも束の間。子どもは一向に目を覚まさなかつた。一日、一ヶ月、一年——いくら経つてもだ。

?外傷は見当たらない。頭を打った跡も：傷一つない。その子どもを？心配した屋敷の主人は、再度医者を呼んだ。

?診察した医者は、目を見開いて啞然とした。以前にその子どもを診察した時はなかつたそれに、言葉を無くした。

?左目、そこに黒の瞳はなく、円環の蛇が刻まれていたのだ。
?——呪われている。

?医者は、心の中で考えたその言葉を口にはしなかつた。先月、子どもの母親の死を看取つた医者は、その子どもをそれ以上不幸にさせたくなかつたのだ。この事実は、医者の胸のうちに留められた。

?

?だが、医者の不安は消えることになる。そのまた一ヶ月後に診察に訪れた際には、その紋様は消えていたのだ。普通の、円くて黒い瞳があつた。

それからも、医者が、ウロボロスの紋様を見るることは二度と起きなかつた。
?斯くして、親を失い身寄りがなく、眠り続けるその子どもは、富豪の夫婦の温情によりその家に引き取られる。

それから七年もの間、？子どもは一度として目を覚ますことはなかつた。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

少年が目覚めてから、一年後——。

まだ日も出ていない早朝。

？屋敷の柵の周りを走る、一つの影があつた。

？ランニングを終えれば、身体を伸ばして、基礎的な筋力トレーニング。

そして、木で作られた剣を構え、刻み込まれた動きをなぞり、反復すること半時。再度身体を十分に伸ばし、時計を確認。

？太陽も、もう顔を出していた。

？屋敷へと戻つてシャワーで汗を流した後、ベッドへと入つた。

開いている片？目を閉じる。

？

「ウソップさん！おはよう！」

耳に届く元気な声と共に、鼻にぎゅっと感じる圧迫感。しかし、ウソップは動搖することなく、ゆっくりと目を開く。

「お・は・よ」？

にここにこと晴れ渡るような笑顔を見せる少女は、髪を垂らしながらウソップを覗きこんでいた。自慢の長い鼻をぎゅっと握りながら。

? 最初は戸惑っていたその行動だったが、ウソップにはどうしようもなかつた。なぜなら自分が眠っている七年間に、少女の習慣となつていたのだから。この屋敷にお世話になつてゐる身としては、これくらいのことは、どうつてことない。

? それに、少女が見せるこの朝の笑顔が、ウソップは好きだつた。

?

「おう！ おはよう！ 今日はどうするんだ？」

? 「お散歩いきましょつ。もう準備もできてるわ」

動きやすい服装をアピールする少女に、ウソップはニヤリと笑う。

「よしっ。カヤ大佐！ 十分後に玄関に集合せよ！ 本日の早朝訓練を始めるつ

? 「ふふつ：了解です！ ウソップ大總統」？

パタパタと部屋を出していく少女を見送つた後、ウソップは、ぴょんつとベッドから起き上がつた。

ウソップ、十二歳。

? この屋敷での肩書きは、執事見習い、お嬢様の学友、お嬢様の遊び相手、あと本人はまだ知る由もないが、この家の後継者候補。

一年前に、長い眠りから覚めたウソップは、リハビリの必要もなく、普通の生活を送り始めた。

? 快復したウソップは、周囲の不安を吹き飛ばすかのように、優秀だった。否、優秀すぎた。

? だが決して、天才的な頭脳を持つていた訳ではないのだ。

? 勉学、礼儀作法、剣術、他のこともだ。ただ、吸収が早かつた。七年間の遅れを取り戻すかのように。まるで、忘れていたことを、思いだすかのように。
? だが、射撃術は別だつた。百発百中どころではない。誰も、ウソップが的を外したのを見たことがないほどの実力だつた。

「うし、弾確認」

そして、ウソップは、お嬢様のボディーガードを務めている。

鏡の前に立ち、素早く執事服に着替える。一通り確認して、最後に眼帯の紐を確認した。

? 一一眼帯に隠され、閉じられた左目には、ウロボロスの紋様が鈍い光を発していた。

・・・・・

ああ、死ぬんだ

私は今、この瞬間に悟つてしまつた。

?……うん、もしかすればもう少し前、階段から足を踏み外した時には、もう…。

?——今日は、吸い込まれてしまいそうなくらいに綺麗な夜空だつたな。星は眩しいくらいにキラキラと輝いていて、堂々とした満月は、わたしとゾロを照らすためだけに空に浮かんでいるみたいで…。

何も見えない。

視界は真っ白に塗り潰されて、チカチカと点滅している。

? 頭が割れそうなくらいに痛い。

? 本当に割れているのかも。

? でも、声は出ない。

? そればかりか、指の一本も動かせない。まるで、石になつたみたいで。

—— そういえば、ゾロから綺麗な石をもらつたなあ。いくら綺麗な石とは言え、涙が止まらなかつたわたしを励ますために渡してきたのが、拾つた石。ゾロはまだまだ子どもだ。

? でも嬉しかつたよ。

お父さんの声が、すごく遠くの方から聞こえてきた。

? …あ、少し浮いた? 浮遊感。

? 頭の後ろから、とくんとくんつて何かが流れていつている。

眠たくなつてきた。

お父さん。何言つてるの。わかんないよ。もつと大きな声で言つてよ。

——強くなりたかつたな。

?世界一、強くなりたい。世界で一番強い剣豪になりたい。

?女の子でも：女でも、世界一の剣豪になつてみせるつて、誓つたばかりだつたのに。

?

?ゾロと、約束したばかりだつたのに。

神様が、だめだつて言つてゐるのかな。

?やつぱり、私が女だからだめだつて。

?女だから、望むことだつて許されなかつたのかな。

やつぱり、男に生まれたかつたなあ。

?

悔しい、悔しい、くやしいよ：ああ男の子達が：ゾロが、眩しいよ。

?弱いクセに、負け犬のクセに、私に二千一回も負けてるクセに。

?

?なんで、なんで、どうして私は。

?わたしは

ë ë ë ë

天国…？。

？いつのまにか、変な場所にいた。

？木目の壁なんて、何処にも見当たらない。真っ白だ。？本当に何もない。

？…何だか、寂しいな。

？天国ってこんなところだつたの？

しばらくぼーとして、そして一步踏み出した。

？爪先に、何か当たる。「ぐえつ」ちょっとだけ蹴つてしまつた。

それは、？手のひらくらいの大きさの、トカゲみたいなものだつた。手足が何本もあるように見える。

しゃがんで、じつと見てみる。

「…天使様？」

？「…この姿が天使に見えるの？目、腐ってるんじゃない？」

一応、聞いてみただけだよ。でもやつぱり、天使じやなかつたみたい。

? 見た目からして、どちらかと言えば悪魔なのかも。悪魔も見たことはないけど。

「……、天国でしょ？」

? 「あつはつはつ！ そんなものはどこにもないよ。死んで楽になれるはずがない

じゃないか、」

「じゃあ、ここは地獄？」

神様を恨んじやつたから、地獄に墮ちたのかもしれない。

「おチビさん、アンタ馬鹿だよねえ。天国がないのに、地獄があるなんてどうして考えたのかなあ；」

?

? 心底バカにしたような口調だ。

? 少し、ムツとする。

「……じゃあ、ここはどうよ」

「君の心の中……って言つたら、納得するかい？」

? 「しないよ」

「だよねえ。でも、本当さ。……なんと、このエンヴィーが、わざわざ君の命を救つてあげたんだ。そのせいで、見ての通り、未だに手の一つも動かせない。それなのに、そ

のお返しが足蹴だよ。信じられないね。ほら、お礼くらい言つたらどう?」

? 「…わたし、まだ生きてるの?」

? 「、ちつ…寝たきりだけどねえ。あれから…たぶん、一年くらいは経つてるんじやない?」

本当なのかな。嘘は言つてない気がする。

? だつて、この人(?)が言う必要ないから。悪魔だつたら別だけど。

? 自分のこと、嫉妬(エンヴィー)つて言つてたな。変わつた名前。

「ありがとう…エンヴィー? 私、くいなつて言うの。助けてくれて、ありがとう」
「…つまんないなあ、」

ここに来て、一週間くらいかな。

? 私と違つて、エンヴィーは外の様子がわかるみたい。

?でも、エンヴィーはあまり話してくれない。初対面の時は何だったのか、殆ど無視される。

だから、私のことを一方的に話した。

?エンヴィーは、何も言わなくて、聞いているのかもわからなかつたけど、それで十分だつた。

?むしろ、エンヴィーがそんな態度だつたから話せたのかもしれない。真剣に聞いてくれたりしてたら、きつとこんなにスラスラと話せなかつた。

?私の人生、いいことも悪いことも、全部話した。

?あ、一つだけ聞いた。エンヴィーは、男の子でも、女の子でもないみたい。

?だから、何も気にせず、死んだと悟つた瞬間までの、全てを話した。

そして、何も話すことがなくなつた。
すごく暇になつた。

?剣の型をなぞつたり、走つたり、大声を出してみたり…考えられることは大体して、暇になつた。

?だから、無視を続けるエンヴィーに、しつこく話しかけた。両手で包んで、^{つかまえて}幾日も（たぶん）ずっと話しかけた。

?そして、ついに。

「いいよ。このエンヴィーが何をしてきたか、全部話してやるさ」

エンヴィーは、口がマシンガンになつてゐるんじやないかつてくらい、絶え間なく話し続けた。すごく投げ槍つぽかつた。

? エンヴィーの話は、エンヴィーが生まれた時から始まつた。

内容は：予想していたよりもずっと：ううん、私じや考えられないくらいに残酷なものだつた。

? 私の言葉じや言い表せないや。

途中、聴くのが嫌になるときが何度もあつた。胸が苦しくなつた。吐きそうにもなつた。涙も出ていたと思う。

? けど、じつと堪えて、黙つて聞いていた。

? だつて、ここで私が止めてしまつたら、エンヴィーは二度と話してくれなさそうだつたから（? 実際に、エンヴィーは私の反応を見ていた）。

? 幸い、エンヴィーの話し方には、全然心がこもつていなかつた。どこか、実感がかつたのだ。まるで、作り話をするかのように語つていた。

? それでもダメージを受けたんだ。だから、もし、エンヴィーが本当の話ように、感情を込めて話していれば、私はきっと心がおかしくなつていたに違ひない。

そして、苦悶の表情をしていただろう私に対し、エンヴィーは？無感情だった（たぶん）。

？でも、話の途中、一人の少年が出てきた辺り。それから、その丸い瞳の先は、何もない宙に向いていて――いや、きっとエンヴィーには見えるモノを、ずっと睨み付けていた。

どれくらいの時間が過ぎたのかな。

？エンヴィーは、言葉に詰まつたように、途中で話を止めた。

？止めたのは、そこからがエンヴィーの最期の瞬間だつたからだと、何となく気づいた。

？いや流石にわかるよね。エドワード・エルリックに掴まれたところで、話は途切れただだから。

？握り潰されちゃつたのかな。

？ううん、それは違うか。きっと、エドワード・エルリックは…エンヴィーは…？

「エンヴィー、自分で…自分で死んじゃつたんだね」

？

？私のその言葉に、エンヴィーは、濁つた瞳だけを向けてきた。

「……そ、このエンヴィーは……」
 そう肯定したエンヴィーの声は、無気力で、無感情。ほんとにどうでもよさそう。自分のことなのに。

? でも、何故だろう。エンヴィーの話を聞いた後だからかな。なんとなく、悔しさとほんの少しの…高揚に似た感情がある気がした。

「エンヴィーは、私を乗つ取ろうとしないのね」

? 「意味ないの分かってるのに、しないよ。それに、お前みたいなガキなんて、こつちから願い下げなんだよ、」

「ひどい」

「…私ね、エンヴィーの気持ちが理解できない。なんで、そんな酷いことできただろうつて…思う」

? 「別に、お前なんかに分かつて貰おうとも思わないよ。そもそもーー」

? 「でもね。エンヴィーは私のことを、救つてくれた。それで…だから、私はエンヴィーのことを…エンヴィーがどんなに酷いことをしてきたとしても、嫌いになれない」

? 「自己中心的な、ニンゲンらしい考え方だねえ、」

? 「うん、そう思うよ。私たち、似てるね、エンヴィー」

? 「はあ…? やつぱりお前、頭沸いてるんじやーー」

エンヴィーの言葉を遮るように、エンヴィーを胸に引き寄せた。

? 嫉妬。——嫉妒。

? エンヴィーが、エンヴィーのお父さんからもらつた、唯一の感情。

? 魁い感情だ。そして、何て救われない感情なんだろ^{モノ}う。

?

？でも私は、嫉妬を拒絶しない。だって、私は嫉妬せずにはいられないから。前は、男の子が羨ましかつた。だけど今は、生きている人皆すらが羨ましい。どうしようもないと思う。

? エンヴィーのせいだよ。

?前のわたしは、こんなに陰険じやなかつたよね?あんな酷い話聞いたから、きっと

わたしは変わっちゃつたんだ。

?でも、そんなに不快じやない。

? なんでだろう。少しだけ、いとおいしいの。おかしいよね。

?きっと…エンヴィーがいるからかな。

?

エンヴィーが何か騒いでいる。

わたしは、この場所よりも、もつともつと白く——眩しい光に包まれた。

ë ë ë ë

起きたら、ゾロがいた。「……それで、そのおにぎりって技なんだけど」とか、寝ている私に話しかけていた。おにぎりって……どんな技なんだろう。おなか空いてきた。

「お前……この二年間何してたんだよ！」

? 「何って」

ずっと眠っていたんじゃないの?

? というか、二年も寝てたんだ。そのわりには、頭はすつきりしている。

? 指も動く。腕も、足も。起き上がつてみる。

? できた。

? あ、ゾロが成長してる。顔が、少し……こわくなってる? でも、すごい泣いてる。涙と、鼻水とで、顔がぐちやぐちやだ。

「くいなお前！男になつたり、女になつたり大変だつたんだ！」

？「え？」

『、そのマリモ君の反応が特に、楽しくてさ。性別しか変化できないのは残念だつたなあ。ほんとは、カエルとかなつてやろうと思つたのにね、』

？「えつ：待つた！そんなことより!!」

？

あの白い場所に、わたしはもう行くことはなかつた。エンヴィーは、変わらずそこにいるみたいだけど。

?

東の海

ルフィ十一歳の出航

「エースがいなくなつて、もう三ヶ月か？」

ルフィは、コルボ山の頂上にある岩場で、日の出を迎えていた。ほろりと涙を一滴流すルフィの顔は、オレンジ色の朝日で彩られている。

半月ほどで慣れた生活の変化も、いざ思い返すと寂しさが込み上げてくるものがあつた。

『仕方ねえよ。アイツもそれなりの歳だ。お前も兄貴の門出を祝福してやれよ、』
「うるせえ』

『、あ？なんだよ、』

ルフィは、そっぽを向いてグリードを無視する。

そんなルフィの様子に、グリードはどうしたものかと頭を搔いた。

『、エースには、エースの人生があるんだよ。そんなことは分かつてんだろう、』

「でも、エースが海に出る十七歳までは一緒のはずだつたんだ」

『、つて言つてもよ。ていうか何で今さら、』

『今さらつて…お前のせいだぞ！グリード…グリードがあんな事言い出さなかつたら、エースは出て行かなかつたんだ！』

『んなこと言われてもよ、』

困つた風に言つているが、三ヶ月前のグリードの一言が原因だと、ルフィには確信があつた。

～三ヶ月前

夕食前の出来事だつた。

『、ルフィ、お前ももう十二歳になつたよな、』

「うん、今年の誕生日ケーキは美味かつたなー。また、作ってくれよ
『、また来年な。あれだけでかいの作るのは面倒：じゃなくて、俺とお前が会つても
う五年経つたなつてことだよ、』

「おう、そうだな。これからもよろしく！」

『、そう、よろしくだ。でよ、そろそろ女を知ろうぜ、ルフィ、』
「？知つてるけど…」

『、違えよ。俺の自論を言つてみ、』

「？…ああ、なるほど。グリードが書いてエことはわかつた」

『、よし、じやあ村に行こうゼルフィ、』

「村に？なんでだ？」

『、マキノのとこだよ。お前が頼めばいけんだろう、』

「うーん、まあいつか。いくかーー」

「何処に行くんだルフィ？」

「うわっ！…びっくりした。何だよエース」

「…グリードと話してたんだろ？村に何しに行くんだ？もう日も落ちるぜ」

『、…おいルフィーー、』

「男になりに行くんだ。マキノに頼む」

「…は？…はア！？」

『、あー、』

「…』

「じゃあ、おれ行つてくれーー」

「待て」

「何だよ？」

「…おれは、逃げない…!!ルフィ、寝てろ。おれが行つてくる
「え、でもよーーー！」

「いいから、ガキは寝てろ!!」

ドン!!とエースの周りに衝撃が走った。隣のダダン一家のアジトから、バタバタと物音が響いてきた。

「わ、わかつた。エース、その…」

「行つてくる…！」

『あーあ…』

そうして、エースは山を降りて行つた。その日は帰つて来なかつた。

山に帰つて來たのは、次の日の昼頃だつた。

「ルフィ。おれ、マキノとお付き合いさせていただけになつた。これからはマキノの家に世話になる。夕方からは酒場を手伝うことになつた。そんな顔すんなよ。朝から昼過ぎくらいまでは山にいるからよ」「

ゞゞ

「やつぱり、どう考へてもグリードのせいじやねエか」

『ま、お前にはまだ早かつたつてことだ、』

「意味わかんねエよ」

『いいから、ほら瞑想始める、』

「ちえー…』

『あー、ツイでねえな、』

「ん…何だよグリード。まだ終わりじやねエだろ」

グリードの咳きにより、ルフイの集中が途切れる。ルフイは目を閉じたまま、先程のこともあるつて不満を隠さずに言つた。

それに、ツイでないと言つてゐる割には、グリードの声は弾んでゐる。

『気配の消し方がまんまじやねえか。あー勘弁しろよ、』

「だから！なんだ…よ…?』

勢いのまま目を開けたルフイが見たのは、満面の笑みのエースと、見覚えのないもう一人の顔だった。

「エース、誰だこの女？お前、マキノはどうしたんだ！」

「ぶつ…あははははっ!! 女だつてよ！ルフィ最高だぜつ！なア!?」

エースが、隣の女の肩をバンバン叩きながら爆笑する。女は落ち込んだように、がくーんと頭を落とした。

「くく、まあちよつとばかし女顔になつちまつてるが、こいつは男だよ：ルフィ誰だと思う…？ダメだ、言おう我慢できねエ…ルフィ、お前のもう一人の兄貴のサボさ!! サボが生きてたんだ!! 死んでなんかいなかつた!! 帰つて…来たんだ…!!!」

エースは、途中から涙を流していた。

ルフィは、信じられないものを見たかのように固まつた。

エースは、今までルフィの前では一度も涙を見せたことがなかつたのだ。よく見れば、目が真つ赤になつて少し腫れている。一度泣いていたのかもしれない。

そして、そこまでいつてようやく、ルフィはエースの言葉を飲み込んだ。

サボの顔をじつと見つめて数瞬、ルフィは、ぱくぱくと口を動かした。

「え…で、でも…サボは死んで」

「だから生きてたんだんだよ!! お前も何とか言えよサボ…！ つぐう」

ルフィは、再度サボに、ゆっくりと視線を移す。

サボは、にかつと歯を見せて笑つている。

「ルフィイ…ただいま!!まさかお前にもそう思われて——」

ルフィは言葉を遮つて、サボの胸に飛び込んだ。

それから、半年後。

明け方の時間。ひんやりとした冷気が、海の匂いを感じさせる。天気は快晴。風の向きも悪くはない。

ルフィは、フーシャ村の港に一人ボートに乗つて、出航の準備をしていた。見送りは、村長、マキノの二人だけだ。

「じゃ、行つてくる」

ぼくん、と村長に杖で頭を叩かれる。

「軽いわいルフィ。心配しているワシらが馬鹿みたいだろう」

「そう言われても、一年だけだしよ」

「…考え方さんか。お前の兄はまだしも、お前はまだ十三にもなつとらんのだ」

「航海術も（グリードが）もつてるから心配すんなよ」

「…はあ、海賊にはなつてくれるなよ」

「まだ海賊旗は上げねエよ」

「まだ、か？」

「村長、大丈夫よ。ルフィはしつかりしてゐるわ」
パチンとマキノがウインクを飛ばしてきた。マキノは、グリードの存在を知つてゐるからだ。

事の起こりは、一ヶ月前。サボの提案から始まつた。

「一度、海に出てみないか？偉大なる航路グランドラインには入らねエで、この東の海イーストブルーで：そうだな半年…いや、最低でも一年くらい」と。

そんなことを突然言い出したサボに、怪訝に感じたルフィだつたが、同時に胸を高鳴らせた。実際に、兄の一人はもうすでに海を見てゐるのだ。話を聞いて、興味が湧かないはずがない。

正直なところ、あと五年も待つていられなかつたのが本音だ。

そして、金である。

ルフィはグリードの影響で、日頃から金銭欲を持て余してゐた。たまにゴミ山の港にやつてくるゴロツキ達では、そう金を持つていない。欲は、中々満たされていなかつたのだ。

それがどうだ。

偉大なる航路
（グランドライン）に入らずとも、この東の海（イーストブルー）にも海賊はそれなりにいる。つまり、そ

ういうことだ。宝が取り放題である。

加えて……いや、こちらが本命。賞金首だ。

十歳の頃から手配書を集めては、その金額を眺めるルフィにとつて、サボの提案はまたと無い機会だったのだ。

反対に、エースは興味を示しつつも、あまり乗り気ではなかつた。マキノと離れづらかつたのが、一番の理由である。

最終的には、サボに説得されたマキノに説得され、エースは一年の航海を決めた。

ルフィは、詳しいことを聞いていないため、その三人の間でどんな話があつたのかはよく知らない。

氣にもならなかつた。もう自分の欲に一直線だつた。

ルフィは、今頃ゴミ山の港から出航しているだろう二人の兄を想いながら、海を見据える。

「グリード、一億だ。おれは、一年間で一億稼ぐぞ！」

『、何度も言つてるけど、少し力抜いてけよ、』

「まかせろ!!」

『、あー……サボとエースも少しは言い聞かせとけよな……ま、目標は悪くねえ。いい欲

だぜルフイ、』

「おう！」

ルフイは、意氣揚々に海へと飛び出した。

強欲と怒り

小船が一つ、海に浮かんでいた。

深青が続く風景の中にポツンと浮かぶそこに、人の影はない。

小船の中には、食糧の袋と箱が数個、数冊の本が散らばっている。そして、糸の切
れている釣竿が一本、水面に向かつて伸びていた。

ぼこ、ぼこと、水面が静かに沸き始めた。

それは、次第に大きくなり、不自然に揺れところで、一人分の頭が勢いよく飛び出
した。

「、ぱつはあ…大物ゲット、」

『うんまそー、早く食おう！』

「、慌てんなよ。どつか島についてからにしようぜ、」

船へと乗り込んだグリードの手には、一本のモリが握られている。その先には、
身の丈ほどの大きさの魚が深々と突き刺さっていた。

「はー、うまかった！特に鼻がうまかった！」

『味はマグロだな。質は段違いだつたが、』

ルフィは、日が暮れる頃に見つけた無人島に、船を停泊させていた。今晚はここで過ごす予定だ。

「明日は、ここ探索しよう」

『小さい島だが、宝があるかもしだねえ』

ルフィとグリードは、笑い合つた。

フーシャ村を出て半月。ああ、やはり海は宝の山だったのだ。

海賊船を襲いながら——賞金首は見つかからずとも——宝を見つけては町や村で換金して、現在三百万ベリーの稼ぎだ。目標の一億にはほど遠いが、出航してまだ日は浅く、高額の賞金首にも出会っていないながらも、この稼ぎ。出だしとしては、そう悪くは無いと考えている。

航海は順調と言えた。

『お、ルフィ。船がこっち来てるぜ、』

『ん？えーと、双眼鏡は…と、んー海賊旗見つけ！』

『ラツキー！俺の番だぜルフィ！』

「もう一隻来たらおれだからな！」

ごぼり、と吐き出された血が、甲板に飛び散る。しかし、もはやどこに血が飛び散つているのか判別不可能なほどに、甲板は一面赤黒く染まっていた。

これが、最後の一人だつた。

グリードは、胴体を貫く手を抜き取り、そのまま逆手のナイフで首を切り落とす。この船長の首に懸けられている金額は、二百万ベリー。聞けば、ご丁寧に向こうから教えてくれた。そして、聞いてもいないのに聞かされた。賞金首になつた経緯——残酷非道の行為を。船員達も似たようなものだつた。

生け捕りじやないため、値は三割下がつてしまふが、それでも百二十万ベリーになる。今までで、一番の稼ぎだ。

あとは、宝探しである。

「ちつ、しけてんな、」

『…あんま、強くなかったし』

船を見つけた時のような、喜びはない。死臭に満ちた空氣の中、自然と口数は減つていた。

感情のままに、手を下したわけではない。正義だ悪だとも言うつもりもない。こ

れは一つの商売であると、既に割り切っている。それに、一人である危険性を考慮して、基本、賞金首を生け捕りにはしないのは、事前に決めていたことだ。

命のやり取りも何度も経験してきた。グリードは、言わずもがなだ。それでも、さすがに直後である今は、素直に喜ぶ気にはならない。

捜索を続けても、金品はそれほどみつからなかつた。食糧だけでも手に入れようと、備蓄庫に入る。

「あんまり貯め込んでなさそうだ。人数多かつたし、まあ、そうかね、」

『グリード、あれ、あれ見ろよ！あの上にあるアレ！もしかして！』

「ん？おおつ、」

探索を終えた海賊船に火をつけ、小舟に戻つたルフィは、明かりを付けて一冊の本をパラパラとめくつていた。去年の誕生日に、ガープに頼んでプレゼントしてもらつた図鑑である。

「あつた。これだ、えーとつ。スベスベの実！超人^{バラミシア}系だ。グリード食うか？」

『いや…やめとくぜ。そもそも俺の時がゴムじやねえからつて、本当に食えるかわかんねえし…それで死んだら終わりだしな。スベスベつてのもそそらねえ、』

「よし、じゃあ売ろう。やつた、これで最低一億ゲットだ。早かつたな：目標は二億に

変更しよう

『あー、そうだな。ちなみにこの実、海軍に売りつけねえで、金持ちに売ろうぜ。
そつちの方が多分高くつくぜ、』

「そうかも。能力というか：肌がスペスベになるつて書いてあるし』

それから島を巡ること半月後。

ルフィは、ある大陸に降りていた。表情は暗く、どんよりとしていた。
「ここでも売れねえかな：」

『ま、そうだな。地図にあるのは小さな村だ』

初めの半月は何だったのか、ここ最近は散々だつた。

戻った町で換金したのはいいものの、生け捕りならまだしも、やはり首だけ持ち込
んだのが良くなかったのだろうか。まあ、まだ見た目も相応の十二歳だ。事情聴取で、
かなり拘束されてしまった。

悪魔の実についても、トラブルの種だつた。海軍で提示されたのは最低価格の一億
で、当然売却はやめた。

それからが面倒なことになつた。一体どこから聞きつけたのか、盗つ人が絶えなかつたのだ。宿で襲われた時は、その宿の主人まで協力していたのだから、救いようがない。

売ろうとする島を変えるも、やはり見た目から悔られ、ついにはそれは悪魔の実ではないと難癖を付けられ、無理やり取り上げようとする輩まで出てくる始末であつた。

一番ショックだつたのは、同じくらいの歳の子どもに騙されかけたことである。ルフィは、友達という言葉に釣られた。

ルフィは、悪党の汚さは知つていたが：今回のことでの普通の人間にも悪意が存在することを思い知らされた。

「あ、あつちに商船があるけどダメかな…ヒツジついてるし」

『ヒツジは悪くねえよ。ルフィ、あんまり落ち込むなよ。世の中そんなもんだ、』

「うん…」

『取り敢えず行つてみようぜ、』

船の甲板に上がる。

「へー、いい船だな。まだ新品？けど誰もいねエ」

『金持ちがいんのかもな。島に入つて、村か町探そうぜ』

「うん、そうしよう——つ!?」

撃たれた。

布がが千切れる音がする。左足の太ももに、弾丸が埋まっている。ゴムだから、皮膚の上で止まっているが。

見聞色の霸気を発動させていないとは言え、撃たれるまで、全く気づけなかつた。ルフィは、弾にゴムの身体が引つ張られるのを無視しながら、弾が来た方向に意識を集中させる。

火薬の匂い、僅かな呼吸音：それらを数瞬の内に嗅ぎとる。
——いた。

低い崖の上。木が乱雑に入り乱れている場所の僅かな隙間から、銃身らしきものが見えた。

しかし、距離がある。加えて、射撃者自体は上手く木や影で隠れているために、視認できない。

そして、あの距離から命中させられる腕に驚く。感嘆と同時に、警戒をぐつと引き上げる。

更に一発。弾丸が微かな音と共に飛んで来る。一発目と違わぬ、いや全く同じ場所だ。被弾する前に、半身になつて回避する。

見聞色を発動させている今、出所が分かれば避けるのは難しくない。これでは勝負が決まつたも同然だ。ルフィイは、霸氣を使つたことを、少しだけ後悔した。早目に終わらせることに決める。

ルフィイは、身を低くして駆け出した。

避けることは、今は二の次だ。弾丸が霸氣を纏つていなければ、一度目の射撃で分かつている。

弾丸が四肢に数発、的確に命中する。

——やつぱり、すげエな!!

「当たつてる筈だろ!? 何だよアイツは!!」

射撃者が、悲鳴を上げるように叫んだ。思つたよりも高い声だ。

ゴムの身体を使って、一息で崖の上に上がる。そのまま、一息で距離を詰める。これではもう、射撃は難しいだろう。

すると、射撃者は銃を投げ捨て、木の影から飛び出してきた。

自分と同じくらいの少年の登場に、ルフィイは目を丸くさせる。そして、相手が眼帯で片目を隠していたことに、更に驚かされる。なぜ、隻眼である射撃ができるのだろうか、と

相手の少年も似たような心境なのか、その目には動搖が見え隠れしている。

少年の得物は、二振りのサーベル。二刀流だ。

「くそっ!!」

少年が悪態を吐きながら、サーベルで剣戟を浴びせてくる。

見聞色の霸氣を発動させて、避ける一歩が、速い。加えて、先手を取られたために、攻撃に移れない。相手の剣を受ければ攻撃に転じることは可能だが、まだ相手の手の内が分からぬうちにそう動くのは、早計だと判断する。

ルフィは、後ろへと飛んで距離を取つた。そして、思わず笑みが漏らす。

『……?』

「すげエなお前!!歳、俺と同じくらいだろ!!」

ルフィは、興奮に胸を高鳴らせていた。

射撃は精密、近接も強力。そう出会うことのない好敵手に、目を輝かせる。

だが、対照的に向こうの少年は、恐怖から顔を引き攣らせていた。サーベルを持つ腕は震え、目には涙を溜めている。鼻が長い。

「なん……な、んな、んだお前!!」

「…？おれはルフィだ！」

『…いや、そういうことじやねえだろ。ここは、敵対の意思はないって言つたがいい』

「え、でも戦いてエのに」

『、戦うのは後でも出来るだろ。たぶんあのガキ執事だぜ。服装がそうだ、』

「ちえー！おれはルフィ！敵対の意思是ねエ！！金持ちの家に、商売に来たんだ!!」

「か、金持つて：何を売りに来たんだ!?」

「悪魔の実だ！末端価格で一億の、海の秘宝だ！お前ヒツジだろ！案内してくれよ！」

『、ヒツジじやねえ執事だ、』

「へー、ウソップは執事なのか」

『、さつき言つたよな、』

ルフィは、ウソップに案内で村に向けて足を進めていた。村の端にある豪邸が、ウソップが執事として仕える屋敷だという。

「まだ見習いだけどな……その、さつきは撃つて悪かつた！また海賊が来たと思つてよ！動転してたんだ、本当にごめん!!」

「いいよ、おれゴムだし。それより、お前が見習いつてことは、お前より強いのがいるのかつ」

「…え、ゴム…？」

「ゴムゴムの実を食べたゴム人間なんだ。だから、全身ゴムなんだ」ルフイは、びょくんと頬を伸ばしてみせた。

「ウソップ、その眼帯かっこいいな。おれもしてみたい」

「おつと、これはダメだ。こいつを取つてしまえば…取つてしまつて更に目を開けてしまえば、おれの中に眠っている力が暴走して大変なことになる」

ウソップは、表情に影を作り決め顔でそう言つた。

「何言つてんだお前」

「本当だつて」

「じゃあ、見せろよ」

「だから、見せられねえんだって」

「わかった。いいや」

「いいのかよつ！」

もつと粘られると思っていたウソップは、拍子抜けした。しかし、聞かれないならばそのほうがいい。こんな目、知られたら口クなことにはならないのは分かつていて。そして何より、自分が『もたない』。

「——なあ、お前の父ちゃん、ヤソップだろ？」

その瞬間、ウソップの顔色が変わる。しかし、前を向いて歩くルフィは、その変化に気づけない。

「……お前、何でそれを知つてんだ……？」

「やつぱり！何年か前に会つたことあるんだけどさ、鼻以外お前と顔がそつくりだ。ヤソップはさ、お前のこと話してたんだ。おれと同じくらいの息子がいるつて

「へえ……それで？」

『おい、ルフィー！』

ルフィは気づけない。かつての記憶を思い起こすように空を見上げ、高らかに言う。

「悲しい別れだつたけど、仕方なかつた！海賊旗がおれを呼んでいたから！……だつ

てさ。立派な海賊だろ？」

「…ああ、よくわかつたさ」

「そつか！あ、それとなーー」

「ーーくだらねえつてことがな」

「え…？う、ウソップ…？」

ルフィは、そこでやつとウソップの方を向いた。ウソップは立ち止まって、真っ直ぐ海を睨みつけていた。

『……』

ルフィは、何かがおかしくなっていることに気づいた。予想外の事態に、緊張から思わず顔が引きつる。

「くだらねエ、くだらねエ、くだらねエ…何てくだらない…!!そんなことで…!!」

近くにいても、その音を耳がやつと拾えるくらいの、小さな掠れ声。
しかし、ルフィには、それが何よりも強烈な叫びに聞こえた。

ーー強烈な、怒りを感じた。

「何かウソップが変だ…！ど、どうしたら!?」

『、落ち着けルフィ。とりあえず黙つとけ、』

「う、うん…」

ウソツプに声をかけられないまま、時間だけが過ぎていく。ルフィは黙つたまま、俯くウソツプの背中を見つめていた。

『、ルフィ、少し変わるぜ、』

「あ、ああ」

「、——おい、ガキ、」

「え、な…なんだルフィいきなり…」

実のところ、ウソツプの激情は直ぐに鎮火して、逆に冷静になつていていた。つまり、気まずくなつて俯いていただけだ。あんな状態になつた手前、ルフィに声を掛けづらかつた。しかし、自分でも制御できないのだから、どうしようもないのだ。

父のこととなると、突然沸き上がる衝動。少し意識を向けただけでも、身を焦がすそれに今では慣れたつもりだったが、今回は別だつたのだ。

そして今度は、ウソツプの方が、ルフィの様子がおかしくなつたことに気づいた。
「、なあ、このマーク見たことあるか、」

グリードは、自分に代わつたことで浮き出た、左手の甲に刻まれたウロボロスを、ウ

ソップの前に出した。

ウソップは、信じられないものを見たかのように、顔色を変えた。

「左手の甲……グリード…」

ウソップの呟きに、グリードは引きつった笑いを作り出した。

「やつぱりそうかよ、最悪だぜ…!!そこにいるんだろう?…ラース…!!」

「…」

「…つ、「

緊張が走る。

顎にかけて、冷たい汗が伝う。

ウソップは、その様子をじつと見つめて——首を傾げた。

「…?…おれは、ラースなんか知らねエよ。会つたことない。もしかして、会えんのか
…?」

「は…あ…?」

「なんて言えばいいのか…グリードは出てきたんだ。おれが寝ていた七年間で、み
た夢に」

そう言つて、ウソップは自分の身の上を語つた。

「へえ、キング・ブラッドレイ：いや、ラースはじいさんだつたのか」「…そうだ、アイツは人間ベース：石の中にいるわけねえよな…ん？見た目はな。動きは老人なんかじやねえ。バケモンだぜアレはーー、」

「——君に言われるとはな、グリード君。——変わらず強欲な愚か者が、」

グリードは、大きく飛び退いた。

両腕を硬化させ——反射的に首回りを硬化させる。

「お、おい：？いきなりどうしたんだ？」

『グリード、どうしたんだ？』

ウソツクが目を白黒させていた。

グリードは、ルフイの声で我に返った。息を整え、目の前に意識を置いたまま、ルフイに問いかける。

「ルフイ、今：あいつから何か聞こえなかつたか…？」

『いや、なにも』

「……ウソップ？……お前、今俺のこと強欲とか何とか言わなかつたか？」

「……言つてねエけど」

ウソをついているように見えない。見つめて数秒、グリードは硬化を解いた。

「ははつ、

ああ、何が憤怒だ。ラース 第一、おれのが強い。

何を臆しているのかと、グリードは額から流れる汗を乱暴に拭つて、自分自身に一笑した。

「……そうか。なんか悪かつたな。ルフィと代わる、」

「……はら、へつたく！」

「え、おいつ!? 大丈夫か!!」

嵐の夜の

「ほら、おっさん。ちゃんと載つてるだろ？ 図鑑も海軍のヤツだからよ」

「うーん、しかしなあ。この悪魔の実自体が本物かという根拠にはならないよ」

「それはなー…。あ、おれ悪魔の実食つてるからなのか、変な気をこの実から感じるんだけど…」

「うーん…ウソツップ君。君はどう思う？」

「…こいつはウソはつきません。でも、それでこの悪魔の実の真偽を判断するのは難しいですね」

「えー、でもウソツップ。これ海軍の支部で末端の一億は値がついたんだけど」

「それ先に言えよ！」

難航するかに思えた取引は、その一言で好転した。信用つて大事なんだなーと云うのがルフィの感想である。でも直ぐに、「ま、おれまだ子どもだし、しようがねエカ」と向きだつた。

結果として、海軍が提示した額の倍。二億の値がついた。そうなれば、もつと高くと

欲が出たルフィだつたが、このスベスベの実の知識は全くないに等しい。そもそも悪魔の実の相場も理解できているわけでもない。基本嘘をつかないルフィと、嘘をつかないことをポリシーとするグリードとしては、虚言で商売を進めるつもりはなかつた。

「ねえ、あなた。その実、私がいただいてもいいかしら？」

スベスベの実の行き先は、屋敷の夫人の元へと決まつた。しかし、他に売るつもりだつた物の上、危険性を考慮してやめるように説得を試みた主人だつたが、「もうすぐ結婚記念日でしょ」と「いつまでもあなたに綺麗な私を見てほしい」という言葉で敢え無く撃沈した。泳げなくなることについては、元々泳ぐのは得意ではないらしく、別に気にしないらしい。

結果、夫人はスベスベになつた。スベスベになり過ぎて、座り込んだままツルツル滑つてまともに動けなくなつた。主人は慌てふためき（妻の美貌に更に磨きがかかつたことも含めて）、大混乱だつた。スベスベになつた本人は、楽しそうだつたが。

一時間後には、夫人が摩擦のコントロールを覚えたことにより、騒動は収束した。

「おれも、ゴムのオンオフとかできねエかな？」

『全身ゴムになつてるし、難しいんじやねえの、』

『そつかー。まあいいけど』

ルフィは、屋敷の庭で大の字になつて寝転んでいた。太陽の光を受けたフカフカの芝生が実に気持ちよく、心地よい眠りを誘つてくる。

「いいなあ…お母さん凄く楽しそうだつた。あ…私、このユキユキの実つて食べてみたい。雪になれたら素敵だし、寒い日でも体調悪くならないよ、きっと」

屋敷のお嬢様が呟く。彼女は敷物を敷いた隣で、先程貸した悪魔の実の図鑑を真剣な表情で読み込んでいた。

目に留まつたのが、ユキユキの実らしい。

「お前、身体弱いのか？」

「うん、人より少しね。でも、前よりは体力ついたのよ。ウソップさんと、毎朝お散歩してゐるから」

「へー…あ、そうだ。そのユキユキの実、見つけたら持つてきてやるよ！」

「本当? でも、この…自然系つて凄く希少だつて書いてあるわ。そんなに簡単に見つからぬと思うけど

「んー、じやあ期待しないで待つててくれ」

「そうね、ふふ」

「何の話してるんだ?」

ウソップの、不思議そうな声。見上げると、両手にバスケットを持っていた。香ばし

い小麦粉の匂いが、風に乗ってほんのりと鼻を通り抜ける。

「くれ！腹減った！」

「慌てんなよ。ほら、出来立てだぜ。カヤも、ほら」

「ありがとうございます。今ね、悪魔の実の図鑑を見てたの。ウソップさんは、食べるならどれがいい？」

「うーん、泳げなくなるのは勘弁してほしいんだけど…」

「例えばよ、例えば。本当に食べるんじゃないわ」

「そうだなあ…」

ウソップは、図鑑を受け取つて、パラパラとページをめくつていく。

「ウソップさん、読むの速いわ。もうちょっとゆっくり」

「ああ、ごめんごめん……あ、これなんかいいな、ギロギロ…。ブキブキの実…バラバラの実なんてのもいいな…おっ、ナギナギの実なんてのもあるぜ！くうー迷うな！」

「ふふつ、ウソップさん楽しそう」

「んぐ、ごくつ。なんだよウソップ、微妙なのばつか選ぶなお前」

「ゴムゴムに言われたくねエよ」

「ゴムゴムをバカにすんなよ！」

「…じゃあ、ゴム人間のルフィ君。君は何ができるのかね」

「のびる」

ルフィは、びよーんと鼻を伸ばして、ウソップの真似をしてみせた。

「ふつ！あはは…すごい、そつくり！」

「…カヤ！」

「えつ、何か追加でくれんのか!?」

「ああ、妻も大変喜んでいてね。何か欲しいものがあるなら是非言つてくれ。もちろん、上乗せでも構わないよ」

屋敷の主人は、上機嫌だった。今ならば、何を頼んでも汲んでくれそうな雰囲気だ。だが、ルフィの気持ちは既に決まっていた。

「おれ、あのヒツジの船が欲しいんだ！」

「ヒツジ：ああ、ゴーイングメリーオ号のことか。しかし、ルフィ君。あの船は一人で動かすには厳しんじゃないかな？」

その意見はもつともだ。グリードが航海術を持つてゐるとは言つても、あの規模の船を一人の身体で動かすのは流石に厳しい。

しかし、あの船を今欲しいわけではないのだ。

「おれ、十七歳になつたら偉大なる航路(グランドライン)に行くんだ。だから、その時にあの船で航海するからさ！ちゃんと仲間も集めるから、大丈夫だぞ！」

「ああ、なるほどね。…うん、構わないよ。それまで船は此方で管理しておこう。でも、いいのかい？新品の船を用意することも出来るんだよ？」

「いいんだ。おれ、もうあのヒツジつて決めたし。あの船で冒険するんだ」

「そうかい…」

屋敷の主人は、一人の執事に向かつて笑いかけた。その執事は、照れ臭そうに小さく笑いを返した。

「じゃ、預けた一億と船よろしくな！たぶん、四年後に取りに来るから！あとウソップ、仲間になれよ！」

「だから、なんねエつて。何回言うんだよお前」

「次会つたら、本気で闘おうな！」

「それもしないつて」

朝、ルフィは海岸でウソップに見送られていた。

今の船では小さいだろうと、屋敷の主人の好意で貰つた、一回り大きな船。そこには、一週間分の食糧と、それに加えて保存食から生活用品までもが詰められていた。まさに、至れり尽くせりである。

昨日の今日の出発だ。もう少し滞在していくのはどうかと、別れを惜しまれはした。しかし、ルフィの行動は早かつた。ウソツッ普を仲間に誘つて断わられ、勝負を挑んで断られた昨日の時点で、特に滞在する理由はなかつた。それよりも、まだ未知の海への冒険を早く早くと望んだ。

「またな、ウソツッ普！」

「ラースみたいにはなんなよ！」

「ひやー、すげエ嵐だな」

『しかし、どうすつかな船。貰つたばつかなのに……あーあ、』

『明日、修理すればいいじやねエか。木だつて生えてるし』

『、素人修理で不安が残るが……それしかねえか、』

シロツップ村を出て数日、突然の嵐に遭遇して、あわや難破しかけたところで見つけた小島。しかし、あと少しの距離で上陸というところで、運悪く岩に乗り上げてしまい、船は中破した。

それでも幸いというべきか、何とか島にたどり着き、船をつないで荷物を降ろしてテントを立て、小休止の現在。

ルフィは肉を頬張りながら、強風に揺れる船の様子をじっと見つめていた。

『グリード、何か船きた』

『不幸なお仲間さんの到着だぜ、』

小型の船が、ゆらゆらとこちらに向かってきていた。雨に打たれる小さな人影が一つ。双眼鏡を荷物から取り出して確認する。

『、海賊旗は見えねえな。しかも、乗つてるのはガキ一人だぜ。これは珍しい、』

『おれも子どもで、見た目一人だ』

『、がはは、そうだな。違えねえや、』

そうして上陸してきたのは、たった一人の少女だった。歳は、ルフィと同じか少し上と言つたところだろう。

ルフィは善意から、雨でびしょ濡れになつている少女をテントに引き入れて、毛布を

貸した。

オレンジ色の髪の少女の名は、ナミと言った。

「どうしたんだお前、そんなに落ち込んで。腹減ってるのか？」

ナミは、目に見えて落ち込んでいる様子だった。彼女が話したのも、手を貸してくれたお礼と、自分の名前のみだ。それ以上、口を開いていなかつた。

「お金…落とし…て」

「え？ 声小さくて聞こえねエよ」

少女の声は小さく、そして震えていた。ルフィは、耳を近づけてみるが、それでもブツブツ言っているだけで、何を言っているのか聞き取れなかつた。

そう思つていたら、ナミは唐突に立ち上がりつて、口を大きく開いた。

「だ・か・ら!!」

「うわっ」

「お金！ 落としちゃつたのよ!!」

そう叫んだナミは、荒げた息が落ち着いた後、その場に座り込んで、更に沈み込んでしまつた。ルフィも、その様子に何が出来ると言うわけでもなく、困り果ててしまう。が、そこで閃いた。

「金、必要なら貸してやるよ。いくらだ？」

『、貸すだけじゃなくて、ちゃんと利子取れよルフィ、』

「わかった」

ルフィの提案に、ナミはゆっくりと顔を上げた。その瞳に輝きはない。期待していないのだ。ガキがバカにしているのかと、怒る気も起きない。しかし、目に飛び込んできたのは、信じられないものだった。

「あっ、やべ」

ナミを満たしたのは、驚愕。そして——歓喜だ。目の前に置かれたケースの留め金が外され、ボトボトと落とされたのは、信じられない数の札束だった。

『、裏表くらい確かめろよ。あと、全部出すなよ、』

「悪い悪い」

何を謝る必要があるのだろうか。ナミは、今この瞬間、神に感謝した。神が遣わしてくれたのだろう、目の前の少年に後光が射した。

「全部下さいっ！」

「いや無理。なんだこの女」

『、くくつ、強欲だねえ；』

歓喜から一転。ナミの表情は、絶望に染まつた。この少年は神の遣いではなかつたら

しい。しかし、だからといって、彼女がそこで諦めるはずもなかつたのだ。

『、おい、ルフィ。わかつてるとと思うが；』

「うん、わかつてるつて。おれも決めた。ナミはおれの女にするさ」

『、そうじやねえよ、』

ルフィのハツラツとした声に、グリードは呆れた。どうやらルフィは、一度同じ年代の子どもから騙されたことを、もう忘れてしまつているらしい。

「…ねえ、なんか今変なこと言わなかつた？」

ナミが、恐る恐る尋ねてきた。聞いていたのなら話は早いと、ルフィは笑顔で口を開いた。

「おまえ、おれのモノになれよ」

「いや」

「おれの女になるなら、一億貸してもいいぞ！」

「これからよろしくね、ルフィ！」

「あははっ、すごい！ のびる！」

「おれはー、ゴム人間！ だからな！」

『：おいおい、』

『：うううと風が鳴り、雨がテントを打ちつける中、ルフィイとナミは顔を赤くしてテントの中で身を寄せ合い、酒盛りをしていた。ルフィイは、酒の味はそこまで好きではなかつたが、酔つて仕舞えば別だつた。

ちなみに、酒盛りの発案はナミである。

「それでえ：私には、一億が必要なのっ。私は村を買うのっ」

「へー、じゃあお前村長になるんだ。まだじーさんじやねエのにな！ あはははー！」

「そうよつ。ココヤシ村の村長に！ 私はなるの！ だから一億よこせつ！ ちようだい

！』

「あひやははははー！」

二人とも、それなりに酔つていた。ルフィイは今年十三、ナミも今年で十四という子どもである。将来は酒豪になるだろう彼女も、アルコールに対する耐性はまだ高くなかつた。

「あ…ちょっと、わたし」

「ん？ あ、ションベンか。気をつけてな」

「デリカシーなしか!!」

ナミは、ぱんつとルフィの頭を叩いて、憤りながら、傘を持つてテントを出ていった。残されたのは、叩かれた頭を何となくさするルフィである。

『おい、ルフィ。気づいてんだろ。油断はすんなよ』

「わかつてるさ。金だろ」

そう言うルフィの声には、酔つてはいるものの、理性を感じさせた。

『なんだ。思つたより酔つてねえな、』

「グリードが呑んでるからだろ。多分、それでおれにも耐性できた』

『なるほどな。感謝しろよルフィ、』

「あーうん。…グリード、決めごと覚えてるか?』

『ん……ああ!』

はて、何だつたかと考えたのも一瞬、グリードはルフィが何を言いたいのか察した。そして、ニヤリと含んだ笑みを浮かべた。

相手が少しガキすぎる気もするが、考えるまでもなくルフィもまだガキなのだ。特に

これと言うことはない。

『、金も地位も全てオレ達の物。だけど、オンナだけは別物、』

この航海の前に決めたことだ。一方の邪魔はしない。逆もまた然りだ。

酔い潰れている訳でもなし、外もこの天気で島も小さい。まあいいかと、グリードは納得した。

『んじや、俺寝るから。うまくやれよ。ただし、合意の上でだぜ、』
「おう」

「あー…ちょっとは酔い冷めたかな…。早くあのガキを酔い潰さなくちゃ」
ナミは、テントから少し離れた場所で、目を閉じて立っていた。雨の音に耳を傾けて、酔い覚ましに努める。ここまで酔ってしまうのは計算外だった。何か、余計なこともたくさん言つてしまつた気がする。

相手は、酒は飲めるようだが、まだまだ子どもだった。そう言つた目も、向けられていないのも確認済みだ。その上で、あの距離を許している。もしかしたら、弟がいたのならば、あんな感じなのだろうか。

「あー、駄目駄目。余計なことは考えないようにしないと」

事実、あのケースは頭からずっと離れていない。ちゃんと確かめもした。目測だが、

確かに一億入っていたのだ。これを逃す手は、絶対にない。

あと少し、あと少しで村を買える。村を救えると感情が先走りそうになつて——冷静になる。慎重にと、自分に言い聞かせる。

こんな機会は、多分もう二度と訪れない。絶対に失敗できないのだ。やつと、自由になれるんだ。

あと少しで、みんなの笑顔が戻るんだ。

「おまたせ。さつ、続き飲もつ」

「え、腹減ったから飯を——」

「いいから、いいから」

コップになみなみと酒を注いで渡す。早く飲めと、ナミは念じながら、ルフィにニコニコと笑いかけた。

「ナミ。おれ、一生お前を離すつもりねエからよ」

「はいはい」

自分よりも年下のガキが何を言つているのかと、内心嘲笑する。少しも心に響かない

その言葉に——いや、むしろ嫌惡するそのセリフに、何とか笑顔を取り繕つて、言葉を返す。

あと少しで一億が手に入ると思えば、何だつてできるんだ。

「じゃあ、決まりだな！」

「ええ、私はルフィのものになりました！」

「そう。あなたのお金は、全部私のもの。だから早く寝ろ。そして、朝まで起きるな。ほんのちよつとは悪い気もするけれど、私に会つたのが運の尽きだと、どうか諦めてほしい。

「そつか。しししし、これからよろしくな！じゃあ、いただきます」

「ああ、届託のない、子どもらしい笑顔が眩しい。別に浄化なんてされないけど。

「うん、こちらこそよろしく！めしあがれ！……え？」

「なんで顔ちかーー

